



[京都市の景観重要建造物]

景 015 (H18)

酒や酢を製造していた林忠二郎の分家として当地に開業した林孝太郎造酢は、移り住んだ江戸後期当時、東側の造酢場の棟だけでしたが、機織業の西隣の町家を平成10年頃に取り、2棟を1棟として改修しました。

通りの北側に面して建つ主屋は、木造中2階建、屋根形状は切妻平入です。東棟の1階は糸屋格子、2階は前面に付面格子がなされ、西棟の軒高は東側の棟よりも低く、1階の出格子には仕舞多屋格子がはめられ、東側の棟の外観と共に通りに繊細な印象を与えています。2階には虫籠窓風の造作がなされ、下屋根には鍾馗の像が祀られています。

内部は店舗として改修されており、主に造酢や出荷作業を行う製造機能が東側に、展示や販売を行う店舗機能が西側に配置され、どちらも梁や母屋等の構造体が現れる造りで、伝統構法の軸組が見取れます。特に西側に配置された1階の展示スペースと中二階から見える梁などの吹抜けは力強さを感じさせます。

創業以来180余年を過ぎた今も、添加物や化学調味料を一切使わず、京の名水と国産米をじっくりと熟成させる、変わらぬ製法で作られたお酢には、時の流れが作り出した味の深みとまろやかさがあります。



展示室



樽